垂水史談会報

2020（令和2）年
3月発行　垂水史談会
第 38 号

【報告】

「第六垂水丸の遭難を語り継ぐ会」を開催

四〇名を超える参加者　　垂水市立図書館

二月一日（土）午後一時半から、垂水市立図書館一階で「第六垂水丸の遭難を語り継ぐ会」が開催されました。

伊集院会長の挨拶、遭難当時の時代背景の報告の後、史料集の中から二篇の体験記を選びお話サークル「野いちご」の皆さんが朗読を行いました。休憩の後、遺族の川井田稔氏、当時を知る川畑賢矩氏にインタビュー対談で当時の思い出を語って頂きました。

参加者は鹿児島市や大隅の各市町から四〇名を超えて、朗読や対談に熱心に聞き入り、意見交換でも活発な意見が出されました。

【伊集院会長のあいさつ】

【　お知らせ　】―　どなたでもご参加ください　―

毎月第四水曜日午後六時半から、垂水市民館で郷土史・文化財などの勉強会を行っています。『垂水市史』の読み合わせが基本ですが、市内に残る文化財や史跡めぐりを行うこともあります。

【連絡先 090―2586―1714　瀬角】

研修旅行に参加して

山田義之

出水武家屋敷・麓見学

一月二十三日、三一名の参加で雨模様の早朝の出発だったが、目的地に着く頃にはすっかり晴れ上がり、絶好の研修日和となった。最初は「日本遺産」となった「出水の武家屋敷」の見学。我々は最初三年前に出来た「出水麓歴史館」で簡単なレクチュアを受け、そしていよいよ百五十年の歴史のある「竹添（たけぞえ）邸」の見学。丁寧な良いガイドを受けつつ、邸内をゆっくり案内してもらった。

庭も雑草一つないように手入れされていた。次は二百五十年の歴史のある「税所（さいしょ）邸」、さすがと思えるような粋なつくりであった。屋内の一角に、雨の日でも弓矢の練習が出来るような場所も設けられていた。囲炉裏端の一辺は一枚板で覆われ、非常時の逃げ口だそうである。この２棟は個人から出水市が買い上げ、観光設備として活用している。

今頃は丁度鶴約一万五千羽以上が越冬中だが、見学に立寄る時間はなかった。しかし車窓から眺められる田園に数羽餌をついばんでいるのが眺められた。

今回の研修地出水・入来とも車窓からは廃屋が見えなかった。活性化している街並みのようだった。

出水麓は平成７年「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された。面積約４４ヘクタール（６ｋｍ×７ｋｍ）。江戸時代出水は「藩の直轄地」で地頭の支配下にあった（垂水は「私領地」）。禄高は５万石（垂水は１万８千石）。現在の出水市の人口は５万６千人（垂水市１万５千人）。

出水麓は中世山城である出水城の麓の丘陵地帯を整地して作られた所。その整地に関ヶ原の戦い前年（一五九九）、「本田正親」が初代地頭に着任してから、二代「樺山美濃守久高」（在職二二年）、三代「山田有栄（ありなが）」（昌嚴〈しょうげん〉：在職二八年、関ヶ原での敵中突破の一員）の治世下まで約三〇年かかった。薩摩の国境の町として、轄防衛上重要な町であった。武家屋敷群の街並みは玉石垣で囲まれているが、この丸味を帯びた石は廻りを流れる「米ノ津川（広瀬川）」から採取したものである。

宝暦年間（一七〇四～一七一一）に藩主島津吉貴の命によって作られた「五万石溝の工事」等、江戸時代を通して七回もの干拓

工事が行われ、約千五百ヘクタールの農地が出来た。（垂水のよめじょ川による水田の拡張二百ヘクタール）

昼食は近くの「なごみ亭」で美味しいハンバーグ定食（フランス料理？）を頂いた。昼食の後、楽しみのお買い物タイムとして近くの物産館「特産館いずみ」に立寄った。出水特産のミカン等、豊富に並んでいた。

入来院麓の見学

出水を出発してから約1時間で入来院到着。入来院は「私領地」で入来院氏が統治していた。（約5千石）見学の時間が短かったので、玉石垣（玉石は廻りを流れる樋脇川から採取）の街並みを歩いた後、①旧増田家住宅（オモテとナカエからなる別当型民家）と、②かやぶき門（鎌倉時代の武家屋敷に設けられた武家門で茅葺きの立派な屋根を着けた門）の2カ所を見学した。街並みはとても清潔で素晴らしく、旧増田家住宅のガイドの案内も好ましく、満足だった。

入来院の歴史：一二四八年、三浦泰胤の乱（宝治合戦）で千葉泰胤が討たれ、彼が所領していた国の高城、東郷別府、入来院、祁答院が渋谷光重に与えられた。光重は将軍の許可を得て、所領を六人の子供に分割した（渋谷五族）。五男「定心」に入来院を与えた。「定心」が移住した時、入来院には軍司系領主の「與田氏」がおり、両者は緊張関係を引きずった。しかし徐々に入来院氏が勢力を強めていった。三年目には領主経営の基礎を固めた。渋谷一族は薩摩で島津氏と所領経営を競った。十一代重總は薩州島津家と対抗し、相州島津家の貴久に末娘を嫁がせた（義久・義弘・歳久の御母堂）。渋谷五族の中で唯一近世にも領主として存続し「一所持」なる大身分を確保した。受領以来明治維新まで約六〇〇年にわたって一国を統治した。

文化会館に帰着したのは予定の一時間遅れだったが、事故もなく、天気にも恵まれ素晴らしい研修旅行だった。

参加した史談会以外のメンバーも大満足のようでした。しかし垂水の文化財に対する取り組みの遅れを、つくづくと感じる一日でした。団長の伊集院統氏は今度「日本遺産」になったのこりの九麓をすべて研修しようと声を大にしておられた。

「麓」視察について

後迫智洋

垂水市とともに日本遺産認定となり、いずれも国（文化庁）の重要伝統建造物群保存地区（武家町）に認定され、また武家屋敷群を観光地として整備している出水市出水麓、茅葺門で有名な薩摩川内市入来麓に視察に伺いました。

江戸時代、薩摩藩は「外城」と呼ばれる地方支配の拠点を設置しました。その「外城」で政務や地方警護を担う武士の住居と陣地を兼ねた町は麓と呼ばれ、藩内には約百か所存在したと言われていますが、その中でも肥後国（現在の熊本県）との境に近く、防衛上重要な場所であった出水麓の「外城」は、藩内で最初に築かれ、規模も最大であったと言われています。

出水麓武家屋敷群の散策拠点として平成二九年五月一日にオープンした出水麓歴史館では、館内には、鎧・兜などの武具、古文書などが展示され、また、空撮映像やジオラマ、グラフィック年表などにより出水麓武家屋敷群の歴史と文化を子供から大人まで楽しみながら学ぶことができると感じました。地元の観光ガイドの武家屋敷内見学や、食事する場所の案内パンフレット等も整備されており、観光地として洗練された印象を受けました。

「フレンチ御膳　麓　なごみ亭」は、武家屋敷の外観そのまま、に、緑庭の一軒家レストランで、地元出水の食材を使った洗練されたランチを、くつろぎながらゆったりいただきました。食事の際の女子会の盛り上がり（建造物だけでなく、食事、お土産の話など）を見て、歴史的観光地として見落としがちな、女性・食の視点は、垂水市の観光経済においても大変重要であると改めて感じました。

旅の終わりに、入来麓に伺いました。

入来麓は中世の清色城跡と蛇行した樋脇川に囲まれた場所に作られた，防御性の高い麓です。中世の曲線的な道沿いの町なみと，近世に拡張整備された格子状の整然とした区画の，２つの対照的な景観が広がっています。当地の領主であった入来院家の茅葺きによる武家門が有名です。しかし、全国にある国の重要伝統的建造物群保存地区であるにも関わらず、入来麓ほど観光商業化されていない保存地区は少なく、稀有な存在とのことでした。静かな佇まいのなかで普通の日常生活が営まれています。歴史通が好む保存地区であると感じました。

今回の視察で、垂水市の今後の麓の活用について、様々な視点を得ることができました。

―たるみず春秋―

灰汁巻やかまどの火守つかまつる

末吉壮次

鹿児島の食べ物・灰汁巻（あくまき）作りは忙しい。そして女性たちが腕を振るう独壇場と言ってもよい。男どもが下手に口出しできないような場に一変する。だから今日は叱られないように釜の下に薪をくべながらしっかりと「火の守（もり）」に徹しなければならないのです。

「つかまつる」で力関係がわかります。

（文章：瀬角龍平）